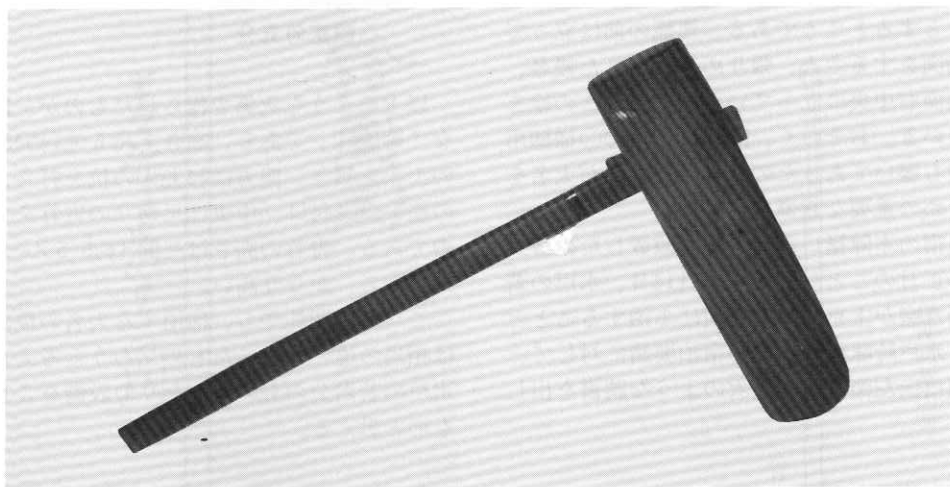


郷土館だより

Vol. 8 No.1

1985. 10. 1



キ ネ

目 次

三島宿本陣文書	1・2
企画展「はこぶ展」	3・4
少年教室報告	5
歴史研究会報告・その他	6・7

三島本陣文書

「御用留」(文久四年)より

御関札絵図面

三島宿本陣家史料集「御用留」(文久四年)中に1枚の関札絵図面がある。正確には関札を取付ける柱と言うべきであろうが、その構造、寸法、材料等が詳細に記されているので、本陣が大名を受け入れる風景を具体的に解説する事のできる貴重な史料と言えよう。

写真の広重が描いた東海道五拾三次之内関宿の図は、本陣早立の風景である。関の本陣に泊まっていた大名一行が、まだ夜も明けないうちから出立しようとするところである。駕籠の前に立って袴姿で指図をする主人、張りめぐらされた幔幕、そして図面右中央に立っている関札が、この絵を構成している。おそらく、関札には「〇〇様御用宿」とでも書いてあったのだろう。本陣が大名を迎えるための重要な設備であった。

当三島宿の本陣樋口家が関札を設置したのは文久四年の正月のことだった。正月14日、水戸の若君松平余八磨が上京の際三島宿に1泊することとなった。水戸吟味役所からの宿泊要請に対して、本陣主樋口伝左衛門からは次のような請書を出している。

御請書之事

御若君様今般被為遊

御上京候二付来ル十四日常

駅私宅江御旅館被仰付難

有御請奉申上候二付

御関札壹枚御渡被成下

冥加至極難有奉頂戴候

依之御請一札奉差上

候処如件

文久四子

正月十二日

樋口伝左衛門

水戸様

御役人衆中様

すなわち、水戸家では若君公の宿泊にあたって、本陣家に宿札を1枚送ったのであった。これを受けて、本陣が入用した費用は次の通りとなり、この代金を水戸役所から拝領している。

御関札御入用品

一、銀五拾匁 尺廻り竹貳本

一、同六匁 芝代

一、同五匁 城縄代

一、同八匁 右手間代

御用場御入用

一、同四十六匁 手間

木品釘代共

銀百拾五匁

為金壹兩三分貳朱

銀貳匁五分

以上のような次第で作られたものが、図のような「御関札」である。高さ1尺5寸(約45センチ)の土手を築き、四方に杉丸太の杭を打ち、杉丸太の筋かきを付け、中央に尺廻りの青竹を立てたものである。青竹の高さは三間(約5.5メートル)であるから、かなり高い。

こうした関札でも、宿泊する大名の位によっては相当の違いがあったものだろうと考えられる。水戸の若君公のものはかなりの設備をこしらえたものと思える。

(杉村)



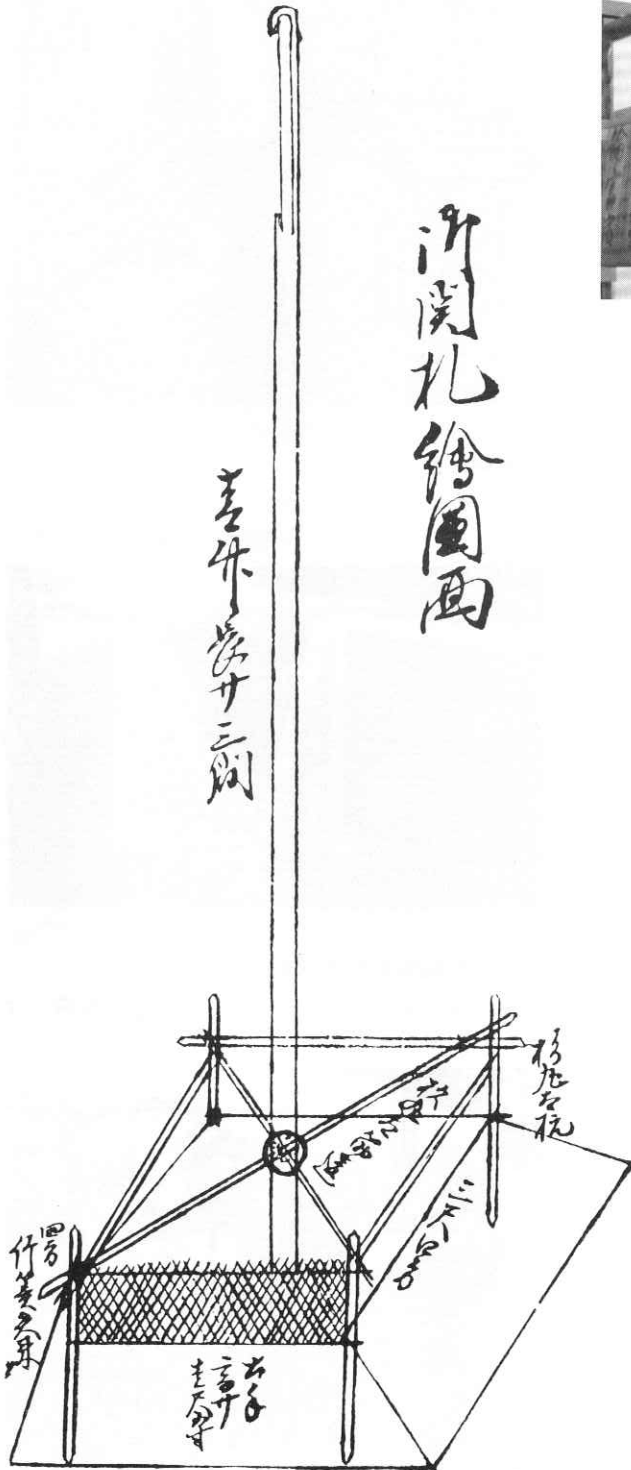
東海道五十三次之内 関 「本陣早立」



郷土館3階展示品「関札」

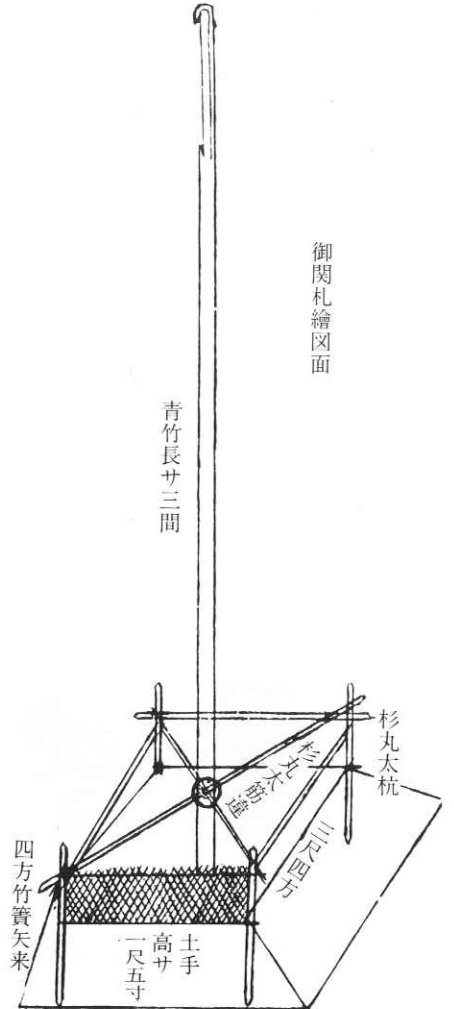
河関札繪圖面

青竹長サ三間



御関札繪圖面

青竹長サ三間



郷土館企画展

「はこぶ」展

三島市郷土館では、秋の企画展として「はこぶ展」を準備しています。

人間の「ものをはこぶ」という行為は、個人や社会の生活を豊かにするために欠くことのできない基本的な作業です。

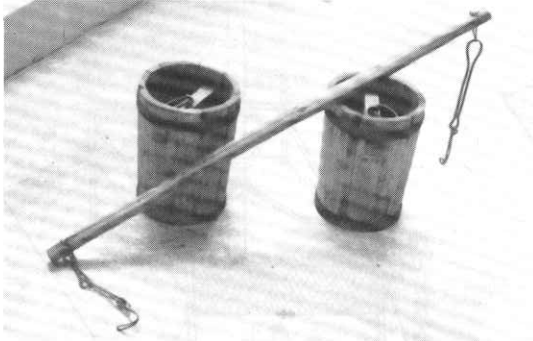
原始的なはこぶの方法は、人間自らの力を使って行なうものでした。手に持つ、肩で担ぐ、背に負う、頭で支えるなど、人の身体の機能を十分に活用したり、簡単な道具を使用してものをはこんだものです。しかしながら、人間の力のみ頼むことには限界があり、運搬方法として畜力や自然力も利用されるようになりました。畜力として利用された動物は、牛や馬が主でした。牛馬の背に荷を付けて運ぶ方法、あるいは荷車を引かせる方法などは、石炭や石油に動力源が変るまでのごく最近まで身近にあった運搬方の主流でした。自然力による運搬には、川の流れを利用した舟運がありました。

このように、はこぶという人間力による基本的な作業は、社会生活の発展に比例し、その道具の進歩、方法の発明や発達を見ることになりました。

私達は今回の企画のなかで、人間の「はこぶ」という行為とその道具の発達史を調査し、展示してみたいと考えています。

ミズオケ

肩担い運搬。井戸水を汲み、家まで運ぶ仕事は、主に女の仕事だったという。



水 売 (鈴木春信画)

水桶をテンピンで担って歩く水売の男。



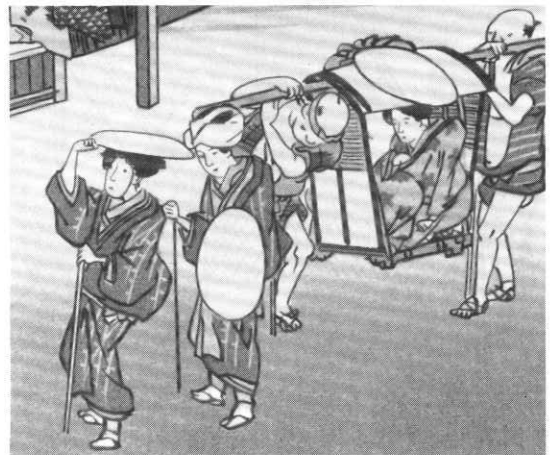
ヤマカゴ

竹を編んで作ったヤマカゴは、街道を往来する旅人に利用された。(裾野市 芹沢義雄氏作)



カゴを利用する旅の女性

カゴは前後を2人の担い手がかつぎ、歩調を合わせて運んだ。

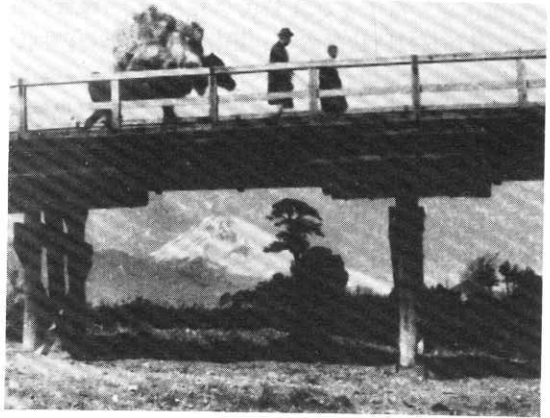


チェア

明治初年の頃、箱根で外人を乗せるために作られたものと言われる。

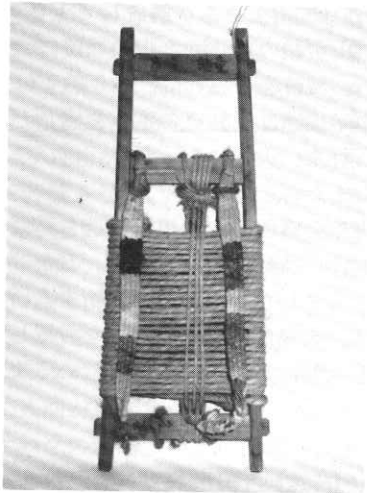


牛の背による稲藁の運搬



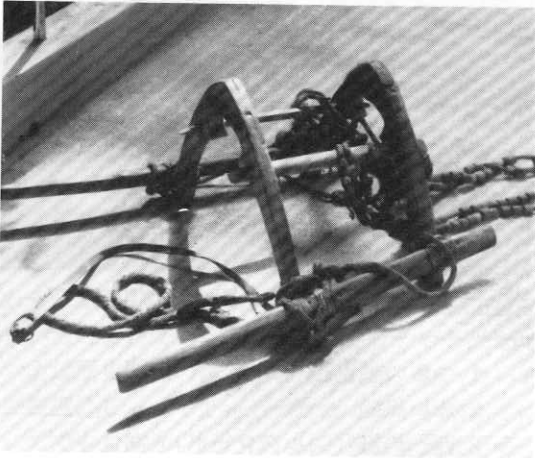
ショイコ

背負い運搬。人間の力による運搬では最大の量を運ぶことができる。



クラ

牛馬の利用による運搬は、人間の力をはるかに超えたものだった。



馬の背による米俵の運搬（箱根）



行商とリヤカー

行商にとって、ものを運ぶ方法は課題であった。リヤカーは車を利用した近代的な運搬方法であった。



少年教室（中学生）「箱根旧街道を歩く」

—報告—

8月18日(日)猛暑の下、箱根西坂を下るのは、汗との戦いでした。

講師沼上城山さんと、中学生16名は、三島駅よりバスに乗り、箱根峠近くの接待茶屋下車、山中新田までの石畳が残る箱根旧街道を、昔の旅の難儀を想いつつ歩きました。

関東ローム層というすべり易い地質のため、雨時には泥地獄となるこの道に石を敷きつめたのは昔の人の智恵でした。多額の費用と人力をかけて作られた石畳の上を300年余の間、どれほど多くの旅人が踏みしめたものか。多くの石はかどがとれ丸みを帯びています。また、さまざまな逸話がこの道に残されました。一里塚、念仏石、兜石、雲助徳利の墓、などの史跡が道ばたにたたずんでいます。こうした逸話・史跡について、歩きながらいねいに、沼上さんが解説して下さいました。

最後に山中城の攻防戦と山中城跡についてのお話を伺い、城跡を一周して、少年教室は終了しました。中学生達は、歴史の重みを感じとったでしょうか。将来、大人になった時、再びこの道を歩いてもらえたらと思います。

三島青年会議所が、箱根旧街道を整備し、案内版等を設ける運動を始めました。おかげで大分歩き易くなりましたが、国道を横断する所が、何ヶ所もあり、大変危険です。立橋を設置して、小中学生でも気軽にハイキングが楽しめるよう望まれます。

*箱根西坂に関する参考書

土屋寿山・稲木久男著 長倉書店刊

「ふるさとの街道

箱根路—三島道石畳を歩く」

(福田)

少年教室（小学生）「箱根旧街道を歩く」

—報告—

小学生とその父兄を対象に中学生少年教室と同趣旨で7月23日(火)、7月24日(水)の両日開催した。

7月23日の参加者は42人(父兄15人、小学生27人)、24日は26人(父兄10人、小学生16人)であった。

講師の川原ヶ谷の沼上城山さんには猛暑の中、2日間にわたって本当にご苦労さまでした。

(稲木)



7月23日の参加者（山中城跡にて）

郷土館「夏の映画教室」の報告

夏休み、快晴とあって、連日親子連れで賑わいました。小学生以下の子供とその親がほとんどでしたので、昔話やマンガ、動物のお話は大変好評でした。歴史的なもの美術的なのは、内容が高度なこともあり、サーッと観客がいなくなります。郷土館らしい映画に人が集まらないのが残念でした。

○会場 郷土館一階会議室

○上映日 上映映画(16ミリ)、入場者数

8月3日(土) 13:15~14:30(以下同じ) 83人

1. つるの恩返し

2. ムーミン

3. 古墳の発掘

8月4日(日)

75人

1. つるの恩返し

2. 赤い風船

3. 西への旅(シルクロード)

8月16日(金)

58人

1. あらいぐまのいたずら日記

2. 東大寺大仏殿

8月17日(土)

53人

1. 星の王子様

2. おば捨て山の月

3. 芹沢銈介美の世界

8月18日(日)

65人

1. おば捨て山の月

2. 新日本紀行三島

合計 334人

(福田)

歴史研究会（報告）

昭和60年度歴史研究会発会式と第一回講座を去る6月30日(日)に開催しました。

本年度の会員総数85名、そのうち当日は49名の方が参加しました。

以下第一回講座の報告をします。

講師は日本大学三島学園長、国際関係学部部長、文学博士、蔵並省自先生です。

（時代を動かした人々）

時代を動かす人々、人間、人物という立場でそれをからめて最終的には歴史の場合には物のとらえ方、考え方、こういうものが大切であると…。つまり、1人の人物をどのように評価するかということについても、ただある人物が過去においてこういう事を行った、あうゆう事を行ったとそれを知るだけでなくして、背景というようなものをからませて人物というもの、その特定の人物というものがどういう風にしてその背景の上に立って活躍しているか、そういうふうな立場で人物をとらえる必要があるのではないかと、こういう様な一般論の話を中心にさせていただいて、焦点をしばって頼朝の場合どうなるかは鈴木先生の方にバトンタッチしたいと、こういう様な形で話を進めさせていただく事を最初にご了承たまわりたいと思っております。それともう一つは、大学をご卒業なされた方、あるいは子供さんが大学に進学されている方、あるいはこれから大学に進学される子供をもたれるご父兄と、本日の皆様方はいろいろと分れている事と思いますが、ひとことでは歴史関係の講義というものは、だいたいあの程度にしゃべっているのだなとそういうふうにしてでもお聞きいただければと思っております。普通日本史をやる場合ですね、皆様方テレビの時代劇を始めとし、あるいは時代小説等たとえば江戸時代とか鎌倉時代とかいう言葉を使ったり、あるいは徳川時代とか源平時代とか、いろいろな言葉を使って昔の話を話題にされるわけですが時代の呼び方ということも、たとえば古いところと言えば大和平野の飛鳥地方、こういう地方を中心に栄えたところから飛鳥時代というような表現でよければ当然その当時の中心地と…。こういうとらえ方をすれば飛鳥時代という言葉を使えばたとえば奈良の都と、7代74年の中心であった奈良の都といえば奈良時代、あるいは鎌倉が中心であったところでは鎌倉時代というよび方からすれば、

この近世の江戸時代はですね、徳川時代、江戸時代とかいろいろ呼び方はありますが、その論法からすれば江戸時代と呼ばなければいけないんじゃないかと…。それを飛鳥時代と呼び藤原時代と呼び、それから室町時代と呼び、徳川時代と呼びという表現がばらばらで一歩化していないと…。ですから人物というか、徳川時代と呼べば足利時代と室町時代こういうふうにはまず何となくあたりまえに呼んでいるのですが、呼び方からすれば、そういうふうには筋を通す事も必要ではないかと、或は古代と言うならば中世、近世というふうな呼び方があるだろう。まあこういったふうな時代区分ですね、まず呼ぶ必要がある。としてその時代その時代に代表的な活躍した人物などが当然出て来る。そうすると飛鳥時代という皆様承知の様に聖徳太子というような人物も出て来るだろうという事になると、その論法でいくと鎌倉時代と言えば頼朝なんというのもその代表的な人物となる。徳川時代といえば徳川家康というのが幕府を開いたと…。それぞれ代表的な人物というものが出て来るわけですが、最初に話しましたようにそういう人物がその時代にどうして中心的な活躍をして評価されているだろうかと、それなりに又、その人を中心としていろいろな文化的事業とか政治的政策の面とか、特色あるものを打ち出してそれぞれの時代がこういう時代であったというふうになって来るわけですね。結局過去の歴史と言うのは我々の先祖から今日に至るまで、つまりは我々の人間が生活してくるところにそういう時代時代というのがあるので、人物を抜きにして過去の歴史というものは展開しているわけではない。その大勢の人物の中からその当時の代表者が取り上げられて、この時代の彼が何をやったかその時代の特色は何であったか、こういうふうになってくるのではないかと…。そういう論法からすれば現在の中曽根さんが総理大臣である。そして現在は中曽根さんが行財政改革を土光さんなどをお願いしてどうやっていったら良いか、或は教育面からみれば臨教審ですが、臨時教育制度調査会あの審議会ですか、あういう臨教審の委員の先生で今後の教育はどうあるべきかとかいうのをやっておられる、そうするとこの今の世の中でその我々の代表者というのが、まあ一応選挙によって中曽根さんが代表者になっている。その中曽根さんを中心としてその人の特色をもっていろいろな政治、経済、文化といろいろな方面の政策が打ち出され

るとすると、これが将来ですね、昭和の50年代、60年代において日本は中曽根さんを中心としてどういふふうな姿が展開されてきたかという事が、この50年、60年後になれば50年前の昭和のこの時代にはどうであったのだろうか、そこにたとえて言えば今言った中曽根さんという人物が代表者の所にクローズアップされてくるんじゃないだろうか…。こういうふうな人物というものがやはりこの歴史をみる上に大切ではないかと…。欠かせる事が出来ないんじゃないかと…。で今日と昔と違うのは昔は一般の民衆なんていうのは政治からは程遠い存在にあって一部の實力者によって政權の争奪が行なわれていると…。そしてその人が支配者になると…。ところが今日は我々主権在民の時代ですから我々の意志によって選挙によって選ばれて来ると…。そういう代表者であると…。だから同じ政治を行ひ政策を進める上にあたってその人の独自の政策というものは昔の支配者と今の代表的なリーダーシップをとるといふ存在はその国民の意志を反映しているか反映していないかという事は昔と同じには出来ないんじゃないかと…。たとえば人によって昔は今と違うという事はよく学生に話をするんですが、テレビの時代劇でやっております水戸黄門ですね、勧善懲悪といひますか、最後は“めでたし、めでたし”というストーリーは決まっているんですが、決まっている事はわかっていてもみているんですが、なんとなく最後は正義が勝つというストーリーになるんですね。その水戸黄門の場合なんかもとらえようによってはテレビのストーリーでは東北へ行ったり九州へ行ったり全国漫遊になっている話ですが、助さん格さんをつれて5・6人の団体旅行、今の我々からするとあの費用はどこから出て来るのかなあと…。ブラブラご隠居で年金をもらってという話ならあんないいご身分はないなあと…。でも当時の江戸時代を考えると、よく言われるのは農民の年貢ですよ。ようするに農民から

編集後記

やはり楽寿館には水が似合う。どこかで誰かが話しています。小浜池の水は今では夏だけの風物誌になってしまいました。一年を通して水があれば全国一の名園なのに惜しい限りです。小浜池に水が必要な様に、三島市を中心にした地域文化にとって、必要な郷土館になりたいものだと思います。
(稲木)

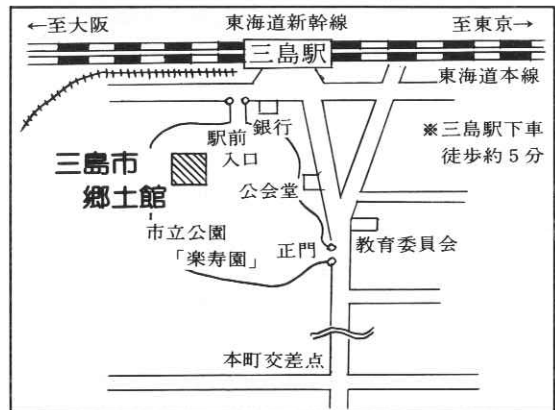
年貢を取りたてたと、今でいう税金ですよ。税金のあがりでもってブラブラしているんだと…。あの当時の権力者はいいなあと、こういうような問題が出て来るんですよ。そうすると今の立場からみれば、あれは不勞所得者で暴君ではないかというようにとらえ方が出来る。ところがそれは今と200年、300年前と時代が違うという背景というものを考えて物をみなければ今の状態と同じ形で物を判断したら今言ったような疑問が出て来てしまう。ところがあの江戸時代というのは士農工商というふうな、よく言われる様に、支配というのは武家政治でもう一方的な支配で農民なんか一方的に支配される立場、一方的に税金を当然出すのが当然と義務づけられた立場、こういう世の中であったという事なんですよ。

～講座内容より一部掲載～

(これは当日会場で藏並先生が話されたものをテープレコーダーで録音し、それを文字に直したものです。良く聞き取れず間違えたり、書き違いがあればそれは録音筆記者一稲木の責任である事をお断りしておきます。)

利用案内

休館日 毎月第1月曜・12月27日～1月2日
開館時間 午前9時～午後4時30分
入場無料 (但し、楽寿園入園の際、有料)



郷土館だより No.22

昭和60年10月1日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館
住所 〒411 三島市一番町19-3
TEL 0559-71-8228
発行 三島市教育委員会